

シンポジウム「『万葉集』の組織をどう見るか」司会雑感

鉄野昌弘

上代文学会の二〇一四年度秋季大会におけるシンポジウムは、標記のタイトルで、二〇一四年十一月二十九日、二松学舎大学で行われた。参加者はほぼ百人である。立案と司会に携わった者として、いささか報告と感想を述べてみたい。

*

今回のシンポジウムの趣旨として、案内には次のような文章を載せた。

『萬葉集の構造と成立』（上・下）の著者、伊藤博氏が亡くなって十年が過ぎた。氏が精緻に明らかにした『万葉集』の「構造」は、いかにも段階的な「成立」を思わせる。しかし伊藤氏没後の研究史は、「成立」過程を推測するのではなく、『万葉集』がそのように思わせること自体、すなわち『万葉集』全体がそうし

た「組織」を持つことの意義の解明を目指しているかに見える。今回は、それぞれの方法をもって論じられている諸氏に集まっていたき、今後の研究の方向性を模索したい。

契沖がそれまでの『万葉集』勅撰説や橘諸兄撰説を退けて、大伴家持による蒐集・編纂を説いて以来、営々として積み重ねられてきた編纂過程の考察を集大成したのが伊藤氏であったことは疑いない。それは、近時、城崎陽子・市瀬雅之氏とともに『万葉集編纂構想論』（笠間書院、二〇一四）を著した村瀬憲夫氏が、その共著の第一章として記した「伊藤博著『萬葉集の構造と成立』の顕彰と検証」の言う通りであろう。村瀬氏は、伊藤氏の顕彰すべき点として、1、『万葉集』の全貌を綿密に俯瞰し、その統一ある全体像をしっかりと見通し、2、『万葉集』は一貫した理

念と構成原理を持つ構造体であると明快に主張したこと、
3、巨大な増築家屋のごとき歌集に分け入り、その建築・
増築過程を明快に説き、4、編者を取り巻く外的環境、編
者を駆り立てた内的動機、編纂資料の入手経路の推定にま
で踏み込んで考察を展開したこと、5、萬葉びとの心の像
に迫ることを信条として、それに徹したこと、を挙げる。

おおよそ、1・2が「構造」を明らかにしたこと、3・
4がそれによって「成立」を推定したこと、5が、1・2
から3・4へと進む必然性を示したのと言えようか。つ
まり伊藤氏にとつては、そうした構造を作りだした「萬葉
びとの心の像」を明らかにすることこそが目的であり、編
纂が数段階に分かれ、編者が多数存在するのならば、それ
ぞれの意図や必然性に向き合おうとするのだから。それは、
最晩年の「万葉集の成り立ち」(『釈注』別巻、一九九九)
や、『萬葉歌林』(塙書房、二〇〇三)の諸論考に至るまで
変わらない。

伊藤氏は、かつて『万葉集を学ぶ』シリーズ(有斐閣、
一九七七〜八)の編者として(稲岡耕二氏と共編)、古典
を読む態度として「見る」「切る」「入る」の三つが考えら
れ、前二者を否定するものではないが、目指すところはも
ちろん、古典の世界に受け手として読者も仲間入りする
「入る」態度であると述べた。『万葉集』の世界に入り込み、

「萬葉びと」と心を等しくする。その理想は、そのシリー
ズを読んで勉強を始めた身にとつて、今も魅力的であり、
ともに目指したいと願うところである。

しかし「検証」してみれば(以下は私見である)、伊藤
氏の考察が、「入る」ことが出来るといふ信憑において、
あまりに楽天的であつたと感ずることも多い。それは、特
に伊藤氏が「家持歌日記」(日誌とも)と呼ぶ、末四巻の
捉え方に顕著である。「日記」の体裁によつて、家持の動
向が詳細に記されるだけに、言わば「我々と同じような家
持」が、そこに立ち現れさせられてしまふ。例えば、「歌
日記」の空白期は、巻十六以前の編纂にかかりきりになっ
ていたため(『歌日誌の空白』『萬葉集の歌人と作品』下)、
あるいは巻十九前半部は都の坂上郎女に、五十の賀のため
に送られた(「家持越中歌群三十二首」『萬葉歌林』)と
いった推定は、容易に納得できるものではない。日付を持
つ歌+日付不記歌から成る歌稿を継いで末四巻の原形態が
成立した(「万葉集末四巻歌群の原形態」『構造と成立』
下)というの、現形態の一つの解釈に留まるだろう。総
じて末四巻を、もと「家持家集」であつたとする見解には
疑問が抱かれる。末四巻の歌は、官人としての家持の作に
偏っているし、巻十六以前の歌を読んで初めて理解できる
歌が極めて多い。それは、やはり巻十六以前を継承するの

であり、あくまでも『万葉集』の一部以外ではない。

「入る」態度では、やはり見えないものがあるのではないか。そこに求められるのは、宮廷歌集という趣の強い巻一・巻二から、作者不記歌巻や季節分類歌巻を経て、家持「歌日記」に至るといふ、『万葉集』の極めて雑多で錯綜した組織が、なぜ——どうやってではなく——存立しえたのか、という視点であろう。例えば巻一が多量の左注を含み、時にはそれが題詞と矛盾する結論を記す（八番歌）のはなぜなのか。巻一編纂、施注の段階がいつであるかを超えて、そうした矛盾をはらんで巻一が成り立っていること自体を俯瞰して問う必要があるのだろう。

「入る」ことへの信憑が後退するとともに、以上のような反省が行われ、全体がかように『万葉集』を「見る」ことに傾きつつあるのが、二〇〇三年十月の伊藤氏逝去後の研究動向なのではあるまいか。そして、この一、二年、村瀬氏らの著書をはじめ、注目すべき論考が相次いで提出されている。その論者たちに集まってもらい、その視点やそこから見えるものを語っていただくというのが、今回のシンポジウムの趣旨であった。

*

最初に登壇していただいたのは、神野志隆光氏である。神野志氏は、それまでに発表してきた多くの論考を踏まえ

た上で、二〇一三年に著書『万葉集をどう読むか——歌の「発見」と漢字世界——』（東京大学出版会）を出版され、ここに『万葉集』全体をどう把握するべきかについては、すべて書きつくしたという。よって、詳細についてはその著書に譲り、この発表では、「歌の世界をあらしめる『万葉集』」と題して、『万葉集』へ向かう姿勢・立場を確かめることに重点を置かれた。

その主張の根幹は、タイトルに明確に表れている。「歌の世界」は『万葉集』によって現わし出されたものであり、我々は『万葉集』の中にしかそれを見ることはできない。したがって、そこから現実の「歌の世界」や歌人、「歌の現場」といったものを考えるべきではない。『万葉集』に先行する歌集や歌稿は、あったかもしれないという以上のものではなく、それを検証しようとしても同語反復にしかならない。検証不可能なことに対しては沈黙すべきであるというのが、そのテーゼである。伊藤氏の用語で言えば、「見る」ことに徹して、見えないものはあえて見ようとし、ない態度と言えようか。

神野志氏は同時に、常に『万葉集』の全体を見なければならぬとも言ふ。「全体が部分に遍在する」（西郷信綱氏）と同時に、部分は全体の中で初めて意味を持ちうる。一部を切り出してきてその意味を云々するのは、切り出し

た時点で既に恣意性を免れない。それは『万葉集』を論じたことにならないのである。伊藤氏の論考は、「構造」と「成立」という本来、相矛盾するはずの事柄を繋げて論ずるところに根本的な問題をはらみつつも、ともかく『万葉集』の全体を見据えている点を肯定しうる、と神野志氏は述べた。

しかしその全体を、「構想されたもの」として見るのではない、ということも神野志氏は強調された。あくまで結果としてあるものの意味が問題にしうるのであって、それ以前の構想・意図を論ずるのは、結果を遡らせたに過ぎず、成立論的な発想に他ならないという。やはり不可避免的に循環し、論理的に破綻すると考えるのであろう。その点は、村瀬・城崎・市瀬氏が『構想論』を表立てるのと正面から対立する。

さて、神野志氏が具体例として取り上げたのは、人麻呂歌集の問題であった。いわゆる「略体」の書記が特異なのは、『万葉集』中の他の歌との比較においてである。実際、歌の注釈にあたっては、他の歌との類句関係において読まれているし、そうしなければ読めないものでもある。それが人麻呂歌集の元来の書記ではあったかもしれない。しかし我々はあくまで『万葉集』のレベルで読んでるのであって、人麻呂歌集そのものは問題にできないし、「略体」

を書記史に位置づけることもできないという。こうした人麻呂歌集の把握は、デイビッド・ルーリー氏（人麻呂歌集「略体」書記について——「非対応訓」論の見直しから）『国文学』二〇〇二年三月）によつて提示されたものであるが、上記のような「以前に遡らない」「部分だけを問題にしない」という神野志氏の主張する原則に従えば、必然的に行き着くところと言えよう。

もっとも、神野志氏のこうした立場を徹底することには、自身が内田賢徳氏の発言を引いて言われたように、「たぐさんの納得は得られない」かもしれない。神野志氏が関連論文として挙げた座談会「萬葉学の現況と課題」（『萬葉語文研究』二、和泉書院、二〇〇六年）において、神野志氏が「作者という標識で歌を集めてきて、編年で整理したり方法を考えたりするやりかた」に疑問を呈したのに対して、内田氏は、作者性というのは自明ではないが、『万葉集』は多様な作者層を持っていて、例えば額田王と家持とを同列に扱うことはできないだろうと応じた。それを神野志氏は、『万葉集』というテキストの問題としては、やはり基本的に同じで、いかなる歌人であれ、その歌だけを取り出して見たものをもう一度歌に持ち込めばトートロジーに陥るのであって、厳密には『万葉集』全部を視野に収めて、引いたところからその作品を読む以外にないと、なお主張

する。しかし内田氏は、額田王と家持と、歌の読み方が同質であるレベルを研究が持たなければならぬのは理解できるが、それが達成できる領域はごく限られるであろうと述べたのであった。

シンポジウムでも、神野志氏に対しては、「つきつめる」質問が多く寄せられた。津田博幸氏からは、『万葉集』のテキスト全体が結果として帯びている力、形をあらしめている力とは、原理的に全てのテキストが持つのか、全てのテキストのことは、テキストの形が作り出す力の場の中で解釈すべきなのか、という質問があった。また小川靖彦氏は、神野志氏の論理をつきつめれば、今ある『万葉集』は十世紀の天曆古点本にまでしか遡れなくなるのではないかと問うた。月岡道晴氏も、現在の『万葉集』は、十二・三世紀のテキストによってあらしめられたに過ぎないのではないかと質問している。

それらに対して、神野志氏はいずれも肯定的に答えている。これまた神野志氏の論理（性向？）のしからしむるところであろう。しかしそこまでつきつめた時、そこで何かと言えるか、あるいはそれが妥当するかには、やはり疑問が残る。質問者諸氏も、おそらく疑問視しているのであろう。後世のテキストをもって「8ないし9世紀における意味」（神野志氏レジュメ）を問うには何らかの仮定が介在す

るだろうし、例えば枕草子や平家物語のような極度に動揺する作品にも「厳密な」テキスト論が有効なのかどうか、筆者にはわからない。有効性を問い出せば、神野志氏がそのテキスト論によって、『古事記』の読み方を一変させたほどには、『万葉集』に対しては有効でないように感ずる。

人麻呂歌集の問題に戻れば、現在、我々が『万葉集』の他の歌の訓に頼ってそれを読んでいることは、それが『万葉集』の中でしか問題にできないことと、必ずしも同義ではないのではないか。訓を定める時に、異なる歌同士の相互関係によるのは、別に人麻呂歌集に限ったことではない。例えばネモコロという語と、「心哀」（11・二四八八、12・三一三〇）とか「惻隠」（11・二四七二、二四七三、二八六三）といった人麻呂歌集の書記とに意味的な距離があるのは確かだろうが、反対に、集中に広範に見られる「懃」「懃懃」などの字面が、仮名書例無しにネモコロと訓めるわけではないだろう。逆に音仮名書記であつてさえ、その字音の如何は字書を初めとする他文献によって知りうるわけであつて、厳密に言えば『万葉集』の中だけで読めるのではないとも言えよう。だとすれば、『万葉集』の中で読んでいるというのは、事の一面であり、より広くテキスト間に編まれた網の目の中で読んでいるとも言わなければならないのではないか。

人麻呂歌集の書記の特殊性は、『万葉集』の中でだけでなく、上代の文献一般の中に置いて也十分に注目し値しよう。一方、それが『万葉集』の中で相対的に特殊であるに過ぎないとすれば、人麻呂歌集だけが取り出してはいけないうわけではない。「柿本朝臣人麻呂」が七世紀の歌人だということとは、『万葉集』に書き込まれた事柄である。それに拠って、人麻呂歌集を取り出し、七世紀の書記として問題にしてみる価値は、やはりあるのではないか。神野志氏に「それは『万葉集』の問題でない」と言われることを承知してでも。

巻一〜六を「万葉集の「歴史」世界」、それ以後を「歌の世界のひろがり」という『万葉集をどう読むか』の把握は、神野志氏の設定する枠の中で、整合しているし、正当でもあると思う。しかしそれによって、前記した『万葉集』の含む雑多性や矛盾は、やはり取り残された感を否めない。またその枠から出なければ、神野志氏の描き出す以上のものは出て来ないであろう。筆者は、「あとがき」に「入り口を示す」と記すこの書物の示す入り口から、自分はどう先に進んだらよいのかという戸惑いをも覚えた。そうした余人にはたどり難い、無謬の道筋を「この道しかな」と指さすことに、品田悦一氏から強い批判があったことも、シンポジウムの一場面として記録しておきたい。

*

次にお話ししたいのは、城崎陽子氏である。『万葉集編纂構想論』の共著者の一人として、その書物自体の「構想」を語ってもらおうと考えた（ただし、お話では、三人の見解は、必ずしも一致しているところばかりではないとのことである）。城崎氏は、多方面に業績をお持ちだが、『万葉集の編纂と享受の研究』（おうふう、一九九四）を著すなど、編纂にも長く関心を持ってこられた。

演題は「構想論」が拓く地平であった。城崎氏によれば、「構想」とは、二十巻を編み、形作るための志向であり、その志向を支える理念・理想・主題などである。その「構想」によって「編纂」が行われるが、その流れを正確に追うことは実際にはできない。したがって、あるがままの姿（現態）から「構想」を導き出す他はない。「現態」を見つめることによって、『万葉集』という一つの「つながり」へ至る、いくつかの「つながり」を明らかにするのが、「構想論」の立ち位置であるという。それは筆者には、伊藤説の恣意的に見える部分を修正しつつ、受け継ぐ立場と受け取れる。

その上で、今回城崎氏は二つの問題を提起された。一つは、「構想論」と「作品論」との関係について、もう一つは、巻七から巻十六までをどう捉えるかという問題である。

前者に關して、城崎氏は、一首一首の歌を読み解く「作品論」は、そのままでは歌が配列され、巻を成し、『万葉集』という一つの作品を成すという「構想」を読み解く論理にはならず、そこに位相の差があると指摘された。作品からその「構想」をどう読みとるかが「構想論」の課題となるが、その問題が端的に表れるのが、「部類歌巻」（巻七・十・十四の六巻）である。歌の事情を示す情報に拠らず、歌だけを見つめて巻を編纂する「構想」がそこに存在するはずだからであるという。

そこで後者の問題に移る。城崎氏は、『万葉集編纂構想論』では、専ら「部類歌巻」を扱われた。それらとその周囲の巻々との「つながり」を求めて、神野志氏が「万葉集の「歴史」世界」と呼んだ巻六より後、末四巻の「歌日誌」より前の部分についての「構想」を論じたのである。「部類歌巻」の整理は「様ではなく、「歌の場」（鞍旅など）、「表現性」（悲別など）、「表現形式」（問答・季節など）、「表現技法」（譬喩など）、「世界観」（東歌）などによって部類されている。「世界観」による部類などは、「構想」する側の、作品に対する能動性を示すと思われる、それは残された巻九や巻十五・十六の位置付けに敷衍しうるのではない。巻九は私家集の集積を三大部立によって部類する巻で、一貫した主題を求めることは難しいが、多く歌の内容

が巻七の「鞍旅歌」と連続する（市瀬雅之説）。また巻十五・十六は、ともに歌によって「世界」を物語る巻で、その「世界」を追体験するという「構想」は、「東国世界」を描く巻十四に通じるといふ。

筆者なりに補足してみれば、巻十五の二つの歌群は、ともに中央と分断された状況を語る点で、巻十四と対になる。巻十六の「有由縁（并）雑歌」の前半は、物語的存在点で巻十五と結びつき、後半の地方の歌は、巻十四「東歌」の世界を思わせる。そうした「つながり」を発見して、雑多に見える『万葉集』を組織立てることに意義がある。ただし「歌による世界の追体験」といった言葉で巻十五・十六を捉えるのは、物語的存在であることを「構想」の側から言い換えたに過ぎないような印象を持った。

また「構想」という術語についても問題は残るだろう。小川靖彦氏は、城崎氏に「「構想」は固定的なものか」また「「構想」の主体を問うことはできるか」と質問した。先の問いに關して言えば、筆者も当日述べたように、実際に編纂を行う場合には、「構想」は常に流動しているのであって、「構想」が確定しているのなら、それは編纂が終ったことを意味するように思われる。したがって「構想」から「編纂」へという城崎氏の前提する「流れ」には、やはり疑問が抱かれる。城崎氏は巻を編纂しようとする意

志からして「構想」なのだと思われたが、「構想」が「現態」から導き出されるものとする氏の定義からして、「固定」する以前のもは「構想」ではないし、問題にするに堪えないだろう。その点で、「構想」は結果を遡らせたただけとする神野志氏の意見に筆者は賛成する。

同時に、「構想」という形で「編纂」を論ずることに、意味が無いとも筆者は考えない。小川氏の後の質問に、城崎氏は、特定の誰かということは想定しないと応じた。それが、「伊藤氏後」の研究たる所以でもあろう。しかしどこかに「編纂の主体」として人格的なものを置いておかないと、説明がうまく行かないのではないだろうか。

例えば、巻十九においては、巻末記が最終歌左注と連続しているように、家持はその巻の編者として振る舞っている。神野志氏が言うように、正確には『万葉集』がそのように家持を編集しているとしか言えないのかも知れない。しかし巻全体が、越中から待望の都への帰還を果たした挙句、更なる孤独と政治的苦境に立たされる家持を、「歌日誌」で語っているのだとすれば、擬制であることを承知した上で（大浦誠士氏の発言によれば「一枚ペールをかけた」、それを編者家持による「構想」と呼んでも差し支えないではないかと思うのである。神野志氏のように「万葉集」があらしめる世界）『万葉集』によって編集された

家持」の如く、『万葉集』を人格化して叙述を続けるのは、ひどく不自由である。

*

三人目は、西澤一光氏、演題は「解釈学の視点から見た『万葉集』の組織」である。西澤氏は、近年、『万葉集』のテキスト論のあり方を、「テキストとしての『万葉集』」（『アナホリッシュ国文学』一、二〇一二・一二）、『万葉集』テキスト論の陥穽」（『国語と国文学』二〇一四・三）といった論文で論ずる一方、「集蔵体としての『万葉集』をめぐる——方法的に読むための一試論——」（『古代文学』五二、二〇一三・三）や、『万葉集』集蔵体論の展開——テキストと歴史の問題をめぐる——」（『萬葉集研究』三四、塙書房、二〇一三）といった論文で、『万葉集』を「集蔵体」と捉える見方を提示されている。

西澤氏の発表は、歌学・国学の伝統を通じて伊藤氏に至る編纂論の流れを描くことから始まる。伝統的な編纂論は、『万葉集』の名義・成立年代・撰者の三点セットをめぐるてなされてきた。仙覚は、「道理」「文証」をもって、編纂が天平から天平勝宝年間に行われたことを説き、時代や撰者に関する知を大きく組み替えた。一方、契沖は、『万葉集』の言説空間を規制する言語秩序に鋭く注目し、大伴家持私撰説を強力に主張する。「拙懐」（19・四二八五）と

いった「謙退の詞」が、家持の『万葉集』に対する関与を、単に描かれるというレベルではなく、言わば自らを描き込むというレベルで顕在化させていることを、契沖は明らかにした。しかし同時に契沖は、「家持私撰」に集中する余り、『万葉集』全体が、一つの視点からは見渡せないような錯雑した組織を持つことを取り落している。

続く真淵や宣長が、『万葉集』の卷々を、資料性においても異質なものの集まりと見たことは、統一的な企図に基づく編纂になっていないことを、この集固有の問題としてはつきりさせた。それが近代に受け継がれ、卷一・二を、大伴氏の関与の外で成ったものとする見方が固まってゆく。それを承けた伊藤説の画期性は、卷一・五三番歌までを、題詞・標目の記し方から「原万葉」として取り出したこと、及びそれを「増補」して成った卷一・二の「綜合体」を「母体万葉」と見て、単に類別の原理として捉えられてきた「三大部立」を、二十巻の集蔵の原理として捉え返したことにあり、と西澤氏は評価する。

ただし「三大部立」を揃えた「母体万葉」を核に「増補」されるといふ論理を持った伊藤氏が、その増補の段階として「持統万葉」「元明万葉」などと称したのは、卷一・二に必要な無い物語を読みこむ結果になった。「綜合体」を誰の企図とするかは、現状の『万葉集』からは考え

られない。むしろ大事なものは、「三大部立」を「知」のありようを示すものとしてどう見るかである。「相聞」の語が「文選」の「書」の部に暗示を得たと言われるように、そこには固有の歌学の定礎が目論まれて見られると西澤氏はいふ。

以下、氏は卷七・八に、その「知」の具体相を見て行く。卷七は「三大部立」の枠組を持ちながら、挽歌は増補に過ぎず、相聞の代わりに譬喩歌を持つ。雑歌が直叙的な詠物であり、譬喩歌が比喩的な寄物であることは、中国詩学の「賦・比・興」の三義に着想を得た「正述心緒」「寄物陳思」の二大原理に沿っていると見ることが出来る。かように卷七は、「三大部立」を変質させながら、それによつて『万葉集』全体に繋がっている。

一方、卷八は、四季を分類の大綱としつつ、雑歌・相聞に分ける形で「三大部立」を保つ。季節分類は、「景」と「情」との關係に基づくが、それはやはり、「物色」に感応するという中国詩学の影響を受けている。その「景」と「情」とを、雑歌・相聞に分類したのが卷八で、「三大部立」が上代の人々の「歌」の捉え返しの中に定着した根柢さが窺われる。

総じて『万葉集』というテキストは、複数の独立系を包摂しながら、「歌」をどう見るかという「知」の働きの二

十巻を底流で繋いでいる、というのが西澤氏の把握である。西澤氏の学説史の捉え方は的確であり、興味深くも思ったと思う。特に伊藤説を学説史の中に位置づけることによって、その画期的な面と問題点とを照らし出したのは、このシンポジウムの趣旨に沿って有益であった。

また「三大部立」を初めとする編纂の技術が、『文選』などの総集や『詩品』などの文学論に基づきつつ、雑多な『万葉集』を縫い上げているというのも、むしろ当然のこととして認められよう。

しかしそのことは、必ずしも『万葉集』が雑多であることそのものは説明していかないのではないか。「三大部立」に関して言えば、なぜ「雑歌」が先ず立てられるのか。『文選』にも「雑歌」「雑詩」「雑擬」と「雜」を含む標目は存在するが、それは無論のこと、「補亡」に始まり、「公讌」「遊覧」「贈答」「行旅」等々を経た後、詩部の最後にそれらに入らないものを収めているのである。『万葉集』が「雑歌」から始まることは、集全体の雑多性と繋がっているであろう。

その雑多性は、歌の重複に頓着しないことにも表れている。歌の重複は、『万葉集』のあらゆる部分に見られるが、注記のあるのは歌句に異同がある場合がほとんどで、例えば額田王・鏡女王の相聞歌（巻四・四八八〜九及び巻八・

一六〇六〜七）のように、全く異同が無い場合は、何ら注意されることなく再掲されている（村本春香「重出に注意する『万葉集』左注」二〇一一年度萬葉学会全国大会発表）。それは不注意ではなく、それで構わないという意味を示すのだろう。

こうした言わば異常な歌集のあり方を、西澤氏の「集蔵体」という概念はよく表しているように思われる。それだけに、こうした書物の存立する所以を、この概念を用いて、更に明らかにしてほしいと望まれるのである。西澤氏には、今回の発表と、氏の一連のテキスト論（その意義については、最近、金沢英之氏による的確なまとめがあった。「学界時評」『リポート笠間』五七、二〇一四・一一）との関係を明らかにせよという、品田氏の追及があったことを付言する。

*

伊藤氏が精緻に見出した「構造」は、「成立」によって説明しなければ、おそらく説明のつかないものだろう。そうした「成立」は、『万葉集』自体が語る事柄として、今後も検討してゆかなければならないと思う。それと同時に、『万葉集』が、そのような複雑な「成立」を語ること自体もまた、問題にされてしかるべきだと考える。『万葉集』の「構造」も「成立」も、『万葉集』を考える者にとつて、

やはり究極の問になるだろう。

以上、屋上屋を重ねた挙句に、文句ばかりを連ねたようになつてしまつた。ご多忙の中、ご登壇いただいた三人の方々には、まことに申し訳ないことになつた。筆者の誤解・無理解もあろう。当日の司会の様々な不手際を含め、深くお詫びしたい。